

北朝鮮から見た「帰国運動」

—呉基完・元「在日同胞帰還迎接委員」に聞く—

安部 俊二

“The Home-coming Movement” Seen from North Korea :
An Interview with Mr. Oh Gi-Wan, the Former Member of
the Reception Committee for Japan's Korean Returnees

S h u n j i A B E

序

「教育も医療も無料、祖国は全てを保障する」「北朝鮮は地上の楽園である。祖国に帰ればどんな望みも無条件に叶えてくれる」という朝鮮総聯（在日本朝鮮人総联合会）によるキャンペーンを信じ、日本での民族差別・貧しく展望のない生活から逃れ、差別のない・自由で豊かな生活を送ろうと、一九五九年十二月から一九八四年までで、九万三三三九人にのぼる在日朝鮮人（日本人配偶者を含む）が、「社会主義祖国」北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に「永住帰国」した。これを「帰国運動（帰国事業・帰還運動・北送事業）」という。

しかし帰国運動が始まるころの北朝鮮では、工業生産の増大を目指して発動された「千里馬運動」が社会全般の部門でも推進され、一九五九年三月からは「千里馬作業班運動」が始まっていた。これらは、北朝鮮人民を一人残らず動員し、ノルマを設けてその労働力を最大限発揮させようとする共産主義体制特有の方法であった。「動員体制国家」北朝鮮にとって動員すべき労働力は十分ということではなかった。一九五八年九月の在日同胞北朝鮮帰還奨励の金日成談話を契機に北朝鮮赤十字会と日本赤十字社間で交渉がすすめられ、一九五九年八月カルカッタ協定が成立し、十二月十五日在日朝鮮人九七五人を乗せた帰国船が清津に到着した。帰国者はただちに千里馬作業班運動に動員された。⁽¹⁾ 帰国者の多くは平壤に職場を希望したが、その希望が実現する者は一部であり、労働力が不足した農村や地方都市、炭鉱、鉱山に送られる者も多かった。⁽²⁾ また主食である米の配給も十分でなく、重工業優先の国策も一因となって消費物資が不足し、帰国者にとって不平・不満のある生活であった。日本での民族差別からようやく逃れた帰国者は、北朝鮮では「在胞」・「帰胞」と新たな差別に苦しめられた。北朝鮮独自の「成分」表で帰国者は、「動揺階層」に分類され「監視対象」とされ、なかには思想教育の美名のもとに教化所に送られる者・政治犯として収容所おくりになる者、また虐待・拷問・公開処刑される者もでた。また「行方不明者」も多数でた。⁽³⁾ これが〈帰国運動〉がもたらした「地上の楽園」の厳しい「現実」であった。

このような北朝鮮における帰国者のおかれている実態については、帰国者たちの手紙・北朝鮮訪問者・元朝鮮総聯関係者・帰国者の家族・北朝鮮から脱出し亡命した帰国者自身

によって明らかにされ、⁽⁴⁾ 帰国運動についても批判的な総括がなされてきた。

たとえば一九六〇年北朝鮮を訪問した岡山県朝鮮人商工会の関貴星は、一九六二年三月という早い時期に帰国運動についてつぎのように記した。

「在日朝鮮人を帰国せしめる政治目的についてここで言及するまでもないが、その第一の目的はやはり人的資源の確保であった。……いうまでもなく人的資源の確保は労働力の確保である。と同時に戦時にはそのまま戦闘力の増大である、日本にいる六十万人とされる朝鮮人を呼び返そう、とは誰しも目のつけるところだ。」⁽⁵⁾

朝鮮問題ジャーナリスト・萩原遼は関貴星の見解に同意しながら以下のように述べた。

「朝鮮戦争でおびただしい壮丁を失った北朝鮮が、戦後の復興や建設におおくの人手を欲したのは自然のなりゆきであった。ネコの手も借りたい北が在日朝鮮人に目をつけたのだ。……このほかにもいくつかの目的があったのであろう。それについてはこんごの検討にまつとして、いずれにしろ金日成政権の陰謀によって始められた帰国運動であったということだ。」⁽⁶⁾

また朝鮮総聯活動家として帰国運動に関わった張明秀は、以下のように記した。

「『真の愛国者』を世界にアピールし、そして総聯に対する北朝鮮の指導と統制の強化に帰国事業の本当のねらいがあった。」⁽⁷⁾

「(一九六〇年四月二十二日の) 内閣命令では、帰国同胞が持ち帰った各種設備を社会主義建設に有効に利用するため、さまざまな優遇措置を講じるよう命じている。つまり、帰国事業を通じて、北朝鮮側ではその政治的利益だけでなく、経済的な利益を得ようとした。……在日同胞の企業家および技術者にたいする宣伝材料が用意され、社会主義国家建設に参加する企業家・技術者の組織化がここに始まるのである。これが帰国事業長期化のカラクリである。」⁽⁸⁾

ここでは、帰国事業が最初は〈政治的〉利益のために出発しながらも、半年も経たないうちに〈経済的〉利益を得る活動に「変化」したとする。そして萩原遼が指摘する「いくつかの目的」とはなにか？これらの問いに答えることは、帰国運動の目的・歴史を明らかにすることにつながるであろう。そのためにも実際に帰国運動を担った日本と北朝鮮の実務担当者の「証言」は、重要であろう。そこで、帰国者を「歓迎」する機関として一九五八年末北朝鮮政府に設けられた「在日同胞帰還迎接委員会（在日帰国同胞迎接委員会）」の迎接（歓迎）委員であった呉基完（Oh Gi-Wan）氏に帰国者受け入れの実際を中心にインタビュー取材を行った。そのインタビューは、帰国運動を中心に韓国・金大中政権の「太陽政策」の問題点、北朝鮮による日本人拉致問題（新潟の横田めぐみさん拉致事件ではないが他に日本人拉致を聞いたことがあること）、北朝鮮は日本政府を甘く見ており二〇〇一年十二月の奄美大島沖の東シナ海での「不審船」に対してと同じ毅然とした日本政府の対応が必要であること、北朝鮮における帰国者に対する「差別」意識・韓国における北朝鮮から韓国への「亡命者」への「差別」意識の存在、北朝鮮から韓国への「亡命者」自身の意識の問題点など広範な内容であった。本稿では、まず呉基完氏という北朝鮮の元・政府高官の北朝鮮における軌跡を略述し、次に迎接委員としての呉基完氏の活動を、さらに帰国運動が生んだ「日本人妻問題」、北朝鮮の将来についての見解を紹介したい。二〇〇二年一月十四日韓国ソウルでのインタビューを構成したものである。

一. 北朝鮮時代の呉基完氏

呉基完氏は、一九二八（昭和三）年三月十五日に平安南道江西郡で生まれた。彼の父は、京城（現、ソウル）にあった普成専門学校（現、高麗大学校）商科を卒業すると朝鮮総督府専売局に入り判任官として勤めあげ、退職の日は高等官待遇であった（「一日高等官」）。旭日章勲七等青色桐葉章の勲章も受けた。

呉氏は、尋常小学校を卒業し、平安北道の私立・五山中学に進学した。彼は、中学五年生一解放を迎えた年でもある一の時、京城帝国大学予科を受験したが不合格だった。合格者の三分の二が日本人に残りの三分の一が朝鮮人に割り振られ、朝鮮人受験者にとって競争率は高かった。浪人しようと考えて再び故郷に帰った。

解放の翌年、一九四六年九月一日、平壤に創設された金日成大学に入学した。専攻は農業経済学だった。解放直後、北朝鮮では政治的混乱があり、そこに労働党が入ってきた。朝鮮総督府の役人だった父は「親日派」だったがただちに労働党に入党し、呉氏も入党を勧められ労働党員となった。これが大学入学に有利に働いた。のちに親日派を「粛清」する時期もあったが、父は労働党員として熱心に貢献していたので「親日派」として糾弾されることを免れた。呉氏も「成分」は良くなかったので他の人より勉強し働いたという。「労働党員として活躍した。そこで私は少しは点数を上げたのではないかと思う」。

一九五〇年六月初め金日成大学を開戦の迫った朝鮮戦争のために繰り上げ卒業した。第一回卒業生のほとんどが人民軍に召集され、呉氏も政治将校・大尉となり、第一〇五戦車部隊に配属された。朝鮮戦争が開戦する前—呉氏によれば—北朝鮮は緊張状態にあった。開戦前に六月二五日に韓国に侵略することを知った。開戦一週間前に呉氏が属した第一〇五戦車旅団と第三五七歩兵師団は全兵力を三八度線の最前線まで移動した。開戦後、第一〇五戦車旅団（後、「師団」に昇格）はソウルを最初に占領した師団となった。約三年間呉氏は政治将校・人民軍大尉として従軍した。除隊後、軍功を認められて金日成首相名の「国旗勲章第三級」が与えられた。さらに、ソ連留学生に選ばれてカザフスタンのアルマアタ大学の大学院で三年間農業経済学を学んだ。

ソ連から北朝鮮に帰国後、呉氏は金一副首相（農業担当）の補佐官として配置された。一九五八年、呉氏はソウル大学薬学部を卒業した女性と結婚した。朝鮮戦争の時、北朝鮮人民軍がソウルを占領しその若い男女を集め義勇軍を組織したが、国連軍に敗れて人民軍が後退するとき全員を北朝鮮に連れてきていた。その女性はこの頃第三三野戦病院（後に人民軍病院となる）に軍医大尉として働いていた。呉氏はその病院に行った時出会い結婚する。しかし北朝鮮では南朝鮮出身者は「成分」はよくないとされる。そこに一九六二年末、南労党事件の「残党狩り」にあい妻が逮捕され連行された。妻からの便りもまっただくなかった（すでに妻が処刑されていることを知ったのは、韓国亡命後のことであった）。労働党でその結婚が問題となり、一九六三年一月呉氏は補佐官を解任された。その後工場労働者として働くことになった。「妻も逮捕された。私も逮捕されることになるのではないか。これは、こちら（北朝鮮）で死んでも南朝鮮に行ってもよい。ここ韓国では認められない。だいいち金日成大学を卒業し、ソ連に留学して労働党の党員として活躍した。こんな人が南に来て認められる訳がない。だから北にいても死ぬしかないし、韓国にきても死ぬ。どうせ死ぬなら生きながら、もしかしたら南で生きる方法があるかもしれないというかすかな希望があった」。

その「かすかな希望」を胸に韓国に亡命したのは、一九六五年九月のことだった。ここ韓国では再婚はしなかった。

北朝鮮にいる時、金日成の「成分」のとらえ方は一面的との考えはもっていたが、「核心」成分の人は信じているという。呉氏は北朝鮮にいた時も共産主義建設はこんなものではないという考えは持っていたという。これでは、百年たっても共産主義社会の実現はできないと思った。北朝鮮のインテリはみんなそのように思っているが、口にだすことはできない。「主体思想」とは「金日成・金正日の教えを代々孫々にこの体制を整えるために必要な主義」である。黄書記がその「主体思想」を作った人だが、彼も間違っていたから韓国に「帰順」したという話を聞いた。

韓国についての呉氏の印象は、あまりにも自由であることだ。ある程度の自由は必要だがそれを超えるのは問題だ。韓国人は一定の統制が必要だと思う。自由を放っておいては、何にもならないだろう、と。

二. 迎接委員としての呉基完氏の活動

一九五八年末に政府に金一副首相(兼農業相)を委員長にする「在日同胞帰還歓迎(迎接)委員会」が設置され、呉氏は「歓迎(迎接)委員」として受け入れ実務を担当した。金一副首相が二年間委員長職にある間、呉氏も迎接委員を二年間務めた。政府から清津・興南などの地方に委員を派遣した。委員会は約一〇〇名の各分野の専門家から構成されていた。たとえば、検疫(植物・人間)、職場配置などがあった。金一副首相は、農業相を兼務していたので呉氏もそこに行って植物・動物の検疫を担当した。帰国事業は一九五九年十二月中旬から始まり、一月・二月と日本からの帰国者が主に持ってきた果物はみかんだった。みかんに何かの病原菌がついていないか調べるために、清津の歓迎委員会の部屋に検疫する装置を設けた。呉氏たちは、清津で帰国者を迎えた。また多くの清津市民が迎えに動員された。

ところで、在日朝鮮人の「帰国運動」は一九五八年八月川崎市で開かれた朝鮮総聯の集会で帰国を要請する建議書を採択したのが始めとされる。これは、南日外相あてに送られ当然のように金日成のもとに行く。呉氏は、当時を以下のように回想する。

「あの時は、内閣の非常会議をほとんど毎日開いた。これをどうするか?と。在日同胞は日本で毎日みじめな・ひもじい生活を強いられている。彼らは民族差別を受けながら、とうてい耐えきれなくて祖国に帰る運動を始めた。これを受け入れるのか?政治的には、受け入れなければならない。人道問題だから受け入れざるをえない。受け入れても初めは数千人で終わると思っていた。職場・住まいの問題があり、何万人もの人が帰国することになって非常に驚いた」。

呉氏によれば、この「帰国運動」を理解するには、当時の政治状況・経済状況そして社会状況を知る必要がある。まず当時の政治状況であるが、一九五三年から六〇年まで「南労党事件」という反党事件が続いた。中国から帰国した延安派とソ連から帰国したソ連派の人たちが、一九五八年反金日成運動を起こし、全員粛清・処刑された。「ひどいものだった」と呉氏は語る。このように、帰国運動が開始された時期は政治的に安定しない状態の時であった。

次に経済状況を検討する。一九五七年いわゆる「社会主義改造」が完成したと宣言した。

その内容は、個人経営はすべて廃止すること、農業も集団化したこと、都市の商工業者にも個人経営をいっさい認めないというものであった。一九五七年から第一次経済五カ年計画が開始した。それは、ソ連・中国・東欧の援助に全面的に依存したものだ。そのため一九五六年六・七月には金日成がソ連・東欧を訪問、その援助をたよりに五カ年計画を開始したが、一九五七年ソ連は無償援助を打ち切り、以後全部有償援助に切り換えた。中国の援助も削減され、東欧諸国は、はじめから北朝鮮に好印象は持っていなかった。そのような援助が断ち切られるという状況は、北朝鮮経済には決定的ダメージとなった。こうして経済が最悪の状態になった時期に、在日朝鮮人の帰国問題が持ち上がったのだ。

最後に当時の社会状況がある。政治的な不安定状態と経済の悪化は、北朝鮮の人民に多大な心理的影響を与えた。人々の心理的動揺が拡大すれば、様々な事件が発生する。例えば殺人事件も以前よりずっと増大した。こうした状況で在日朝鮮人の帰国問題が持ち上がり頭が痛かった。

受け入れるか・受け入れないか？受け入れるべきだという国際的な流れがある。これを正面から拒絶することはできない。一応は、受け入れなければならない。

受け入れるならば北朝鮮の人民にどのように〈宣伝〉するのかという問題が発生する。そこで彼らを宣伝集会に動員して、在日朝鮮人の「帰国同胞」は日本で「乞食」みたいな惨めな生活をし、さらに民族的差別を受けてどうてい生きていけない状況にある。そこで社会主義祖国に帰ろうとしているのではないか。確かに私たちも惨めだが、彼らを心から暖かく歓迎しようではないか。北朝鮮では差別はなく働けば配給もある。早く帰国して「北」の人民のように幸福な生活をしよう、と。「北」の人民はこれらの宣伝を素直に受け入れた。彼らは、自分たちは金日成や労働党のおかげで恵まれた生活を送っていると信じ込んでいた。彼らは、その宣伝がどんなにウソであろうとそれをそのまま受け入れざるをえない。比較するものを持っていないのだから。これは、ナチ・ドイツの宣伝相ゲッペルスが述べているように、大げさなウソをついても心理的に受け入れる状態であった。

さらに日本から帰国する「同胞」の九九パーセントが南朝鮮の出身である。しかし彼らは「南」に帰らない。これも宣伝の一つの材料となった。「南」に帰らずどうして「北」に帰るのか？「南」では、人民は「乞食」みたいな生活をしている。であるならば帰国する人たちを受け入れなければならない。帰国同胞を歓迎するために清津の市民二〇〇〇人を動員した。呉氏ら迎接委員は背広にソ連から送られたりっぱな外套をきて、シルク・ハットをかぶって迎えた。一方、清津市民は中国が北朝鮮に無償援助した綿服を特別に配給を受け、それを着用していた。当時の北では一番立派な服であった。埠頭では市民が旗を振りながら「早く帰ってこい」と叫び、船上では帰国者たちが全員甲板に上がって「金日成万歳」を唱えていた。ところが、船が埠頭に近づいてその姿がはっきりと見えるようになると、お互いに驚いた。船上では「地上の楽園ではない。埠頭の朝鮮人はみじめな人ばかりだ。騙された。うそだ」という声がし、一方歓迎する側でも日本から「乞食」のような哀れな人が帰ってくると思っていたのによい着物をきて顔には脂っ気がある、これは何かの間違いではないのか？と思ったという。埠頭で歓迎の列の先頭にいた呉氏は、「私でさえも本当にびっくりした」という。また「これはひどいことになった。今後帰国者をどのように扱わねばならないか？」という気持ちになったという。帰国者にとって清津市民の服装はみじめな格好であった。彼らは「これはうそだ。何だ、これは。でたらめだ」と

タラップを降りながら言ったという。また若者たちは「今度の帰国船で再び日本に帰る。これはひどいところに帰ってきた」と言った。

呉氏ら迎接委員は、このような帰国者の要求を北朝鮮政府として当然認めるわけにいかないと考えた。そこで、清津に一週間滞らせて北朝鮮人民がほとんど食べることをできないりんご・みかんを食事の時に提供するという特別扱いをしたが、それにも拘わらず「こんなにひどい扱いをされた」と不平を漏らすものがでたという。一日三食を与え、白米・肉のスープ・三から五つの副食、さらに日本では甘いものを食べるということで北朝鮮では入手が困難な砂糖を入れた副食を作ったという。帰国者が日本でどのような生活をしてきたかわからないのに、特別扱いしても不平・不満が出る。呉氏は、「こん畜生！」と思ったという。

危機感を抱いた呉氏ら迎接委員は、帰国者に関する朝鮮総聯の調書はあまりにも簡単だったので一人一人に面会して、日本ではどんな生活をしていたのか・どんな家庭環境で育ったのか・財産はどれほどあるか・どんな職場で働いたか・北朝鮮ではどんな職場で働きたいかなどいろんな質問をした。帰国者の希望は平壤で働くことだった。彼らのなかのいくらかは日本から相当の財産を持って帰国した。働かなくても食えるほどの大きな財産を持ってきていた。彼らは、それを現金の形で持ってきたのではなかった。彼らは、現金を朝鮮総聯に差し出してそこから「預かり証」を受け取っていた。例えば、現金一億円・五千万円の「預かり証」を持っていけば北朝鮮のお金で全部返済するというものだった。呉氏たち迎接委員は、その「預かり証」を持って来るように言って、これは労働党に提出して労働党が北朝鮮の現金で返済するか・他の形ですか決定するとして、全部の「預かり証」を労働党に送った。しかしその後党からは一文も帰国者に渡されることはなかったという。そして「ここでは職は与えられ、配給はあり現金は必要でない。どうして一億とか五千万とか必要なのか。働かなければ配給もなく飢え死にしかない。だから労働党の恩に金日成の恩に帰さねばならない」との内容の説教がなされたのであった。

ここで配給制度について簡単に触れておきたい。配給は一月に二回あった。食料・米以外は配給券がある。例えば肉・たまご・いろんな日用品は配給券を与えて商店に行って配給券と現金で貰ってくるシステムである。米の配給は一月二回、十五日分づつであり、他の生活必需品は配給券で購入する。今は国営商店に行っても商品はないがあそこは相当あったという。もちろん現在でも闇市場に行けば何でも購入できる。呉氏は北朝鮮が現在のような経済状況でも滅亡しないのは、その政治的統制の強さにあるという。北の人民は、ただ食べることに追われる。ロシアの革命家レーニンが述べたように「人を統制するにはその人ののどを統制せよ」。これが最も効果のある統制方法で、反対すれば食べることができないのだから反対できない。

このような生活に忍耐できない帰国者の青年のなかには清津で普通の漁船を使って日本に脱出する計画を立てた人がいたと言う。そこには女性も含まれていた。これは自然に摘発され関係者は全員処刑された。そんなことがあっても、日本にかえろうとする事件は、続いておきたという。海からの脱出が困難ということになり、いったん中国に逃れて日本に行く道を探そうとする人が多いともいう。

北朝鮮政府にとって、日本からの帰国者が持ってくる機械・原材料などは〈経済的〉にはありがたいが、彼らがどんな行動をするのかわからなかった。そこでかれらを「国際ス

パイ」としてでっち上げることもできた。この「在日同胞」を信じることができない、初めからそういう疑いの眼でみるしかなかった。「他人を信ずることができないというのは、つらいことです」。「人道的」に彼らを受け入れた背景には、北朝鮮の経済問題があった。「帰国同胞」の財産・技術が欲しかったことがある。政府は、日本が北朝鮮よりもずっと進歩している国との認識はあった。そこで、途中で「集団帰国運動」を組織した。これは、日本で工場を所有している人に、工場の機械・原料とともに北朝鮮に帰国させそして工場を建設・運営させ支配人としての地位を与えるものであった。しかし一・二年後にはその支配人を「社会主義を勉強せよ」と言って解任し、朝鮮人で工場を運営するようにした。例えば大阪から大きな帽子工場を持ってきたことがある。九九年間使えるだけの原料を持ってきたと聞いた。最初はその帽子工場はその人が支配人として経営していたが、一年半後「社会主義を勉強しなければならない」ということで支配人は解任され、金日成の名で帽子は不要だとして軍帽工場に強制的に転換させたこともあった。

帰国者を「労働力」としては、活用しようということにはなかったという。たしかに一部エンジニアや北里研究所にいた博士もいたし、医学博士は多かった。そういう人はいたが、全体的に高度な技術を持った人は少なかった。技術を持った人・芸術の才能のある人は、北朝鮮のそれにふさわしい配置をしまたそれなりの待遇をしたがやはり「不平・不満」をいう。彼らは、資本主義社会に住んだひとだから仕方がない。金日成は死ぬ前に「帰国同胞のなかでなにか問題を起こした人は容赦なく粉碎せよ」といった。そのため帰国者たちはひどい目にあった。そのように金日成の目にうつったので仕方がない。資本主義の腐った思想をもつ人はいくら技術を持っていても仕方がない、とされた。

三、「日本人妻問題」

日朝国交正常化交渉でも取り上げられている懸案の一つで、一部実現した日本人配偶者（日本人妻、日本人夫）の問題についてとりあげる。呉氏によれば、在日朝鮮人の帰国者ととともに北朝鮮に帰国した約一八〇〇人の日本人妻と約一〇〇名の日本人夫がいた。金日成は「この日本人妻と夫については大目にみてやれ」との方針で日本国籍を捨てないまま朝鮮民主主義人民共和国の公民として扱った。

日本人夫については、呉氏は清津で「なぜここに帰ってきたのか？ 男の恥を知れ」と言ったことがあるという。彼らのなかには技術のある人・工場の技師の資格を持つ者もいた。特に現代のコンピューターや先進的な技術を持つ人がいたという。そこで金日成政府も日本人夫に対しては大目に見るということになり、配給も多かったという。

日本人妻にたいする処遇が大きく変化する契機となった事件が、一九六〇年頃起きた「検徳鉦山事件」である。「帰国運動」が始まって一年後、金日成は「現地指導」を検徳鉦山でおこなった。そこは労働者が二万から三万名が働く特級・優良工場であり、多くの帰国者とその日本人妻も働いていた。金日成が「現地指導」を終えて帰る道に隠れていた十から二〇名の女たちが集まって「首領殿」と金日成の前にうつぶせして「私たちは、日本人妻です。一度だけでも日本に里帰りしたい。里帰りしても必ずこちらに帰ってきます」。金日成は微笑んで「そうか、それぐらいだったらなんでもない。よし、平壤に帰ったら必ずお前たちの要求を実現する」と約束した。ところが、金日成は平壤に帰ると「何だ、こ

の野郎たち。何で私の前にうつぶせして醜い行動をしたのか。いくら日本人妻でも日本に帰国させることはできない。もし今度もおなじ事件があれば日本人妻といえども処刑する」と言った。これまでは日本人だから特別扱いをするという雰囲気があったが、この事件以降はその扱いはふつうの朝鮮人帰国者と同じになった。

ところで日朝国交正常化交渉で日本人妻の日本への里帰りが一部実現したが、これについて呉氏は以下のように分析した。北朝鮮の立場でも、日本人妻の里帰り問題は人道的に考えても許さなければならない。ところが、北朝鮮の立場では、日本人はここに一人もいない・全て北朝鮮の国籍を持った人たちだ、そのために「北」の名前に変えた、日本人妻の根拠はない。それでも里帰り問題を「人道問題」として取り扱い、二陣にわたって里帰りさせた。呉氏によれば今後絶対に里帰りはない・ありえないという。いくら日本人妻が日本で里帰りは金正日の恩によるものだと言っても、平壤に帰れば北朝鮮の人民に対して繰り返し私は日本に里帰りしたがやはり日本は腐った社会だと実感した、ふたたび日本へ里帰りはしない、と労働党の前で誓わねばならないという。

四. 北朝鮮の将来

それではこれから北朝鮮は、どのようになるのだろうか？呉氏の予測は、明るくないが、北朝鮮の「政治統制」はあまりに強いので、「北」の人民たちはいかなる形であれ韓国・日本・世界の情勢と「北」のそれとを少しでも比較して理解するような状況がくれば、「今まで我々は騙されていた！」ということに気づくだろう。ところが、金正日はそれが一番心配だから外部情報を絶つことに全神経を使っている。何らかの形で北朝鮮の人民に世界の動きを知らせることができれば、そのまま北朝鮮の崩壊につながるだろうと。もしそれができなければ、ゲッペルスが言うように、真っ赤なウソでもそのウソを十回百回繰り返せば最後にはそれが本当かもしれないと受け入れてしまうことになる。「これは本当にウソだ。だから私たちは騙されてきた、ということになれば、北の崩壊につながる」。北の一部のインテリは十分な外国の情報を持っている。呉氏によれば政府の局長以上の幹部は、韓国の実状をよく知っている。韓国の放送も聞くことができる。これに対して、一般の人たちは韓国の放送を聞くことを禁止されていて、放送を聞いたという罪で処刑されることもある。とくに、人民軍の軍人は厳禁である。

おわりに

呉基完氏へのインタビューから〈北朝鮮からみた帰国運動〉について三点指摘したい。第一に、北朝鮮政府は、帰国運動開始前は帰国者の数は数千人だと予想していたが最終的には九万人を超える民族の大移動となったことである。これは北朝鮮政府にとって予想をはるかに超える「非常に驚く」数字であった。特に一九五九年末から六一年までに帰国者数は七万四七七九人に達した。この背景には、朝鮮総聯による強力な帰国キャンペーン・「社会主義幻想」のもと北朝鮮の実情を美化賛美して伝えたマスコミ報道、当時の日本社会における在日朝鮮人の生活苦・不安定な地位、帰国者の新国家建設への参画の願いなどがあるように考えられる。

第二に、北朝鮮政府にとって帰国運動は、当時の北朝鮮が置かれていた国内的な政治的・経済的・社会的に危機ともいえる状況を乗り越えるための一義的には政治的な行動であっ

た。具体的に言えば、北朝鮮人民と韓国・日本などの諸外国にたいして、資本主義国・日本から帰国者を「人道」的に受け入れることによって資本主義に対する社会主義の優位性を示すこと、同時に帰国者の圧倒的多数が韓国出身者であることから韓国に対する北朝鮮の政治的優位性を示すことであった。対内的にはこれによって北朝鮮人民への支配を強化し国内の危機を克服することであった。政治的な宣伝の性格が濃厚なものであった。その意味では、帰国運動の目的は〈政治的〉であった。言うまでもなく帰国者による財産・技術・労働力がもたらした〈経済的〉利益は大きかった。のちにはこの〈経済的〉利益の方が重視され、在日の企業家の帰国が推進されることになった。

第三に、北朝鮮政府にとって日本からの帰国者は、少数の例外はあるがその大多数は墮落した資本主義社会で育った「信用できない」異分子だとみなされたことである。「地上の楽園」であるはずの北朝鮮の現実には多くの帰国者に失望・幻滅と挫折感を与えた。そこで当局による徹底した教化がはかられ「不平・不満」を口にする者は「国際スパイ」などとして告発、収容所送りになった。この背景には北朝鮮独自の三階層（核心階層・動揺階層・敵対階層）五十一区分による「出身成分」という事実上の身分制度がある。ここでは帰国者の大多数は「日本帰還者」として「動揺階層」に位置づけられ当局による監視対象にされ、居住地・職業・教育・食糧配給にいたるまで露骨な差別的取り扱いを受け、ひとたび家族の一人が逮捕・処罰されると「逮捕・投獄者家族」「処刑・処断者家族」として一族がさらに転落していく恐怖統治システムのもとに置かれたのであった。

注

- (1) 金学俊（李英 訳）『北朝鮮五十年史—「金日成王朝」の夢と現実—』（朝日新聞社・1997年）225—226頁
- (2) 首都の平壤に住めたのは、五パーセントもいなかったという。石高健次『これでもシラを切るのか北朝鮮—日本人拉致続々届く「生存の証」』（光文社・1997年）205頁
- (3) 同上、207頁によれば、その数は約九千人から多くて一万八千人になるという。
- (4) 例えば、石田収『北朝鮮日本人妻からの手紙』（日新報道・1994年）関貴星『楽園の夢破れて』（亜紀書房・1997年）鄭箕海（鄭益友・訳）『帰国船 北朝鮮凍土への旅立ち』（文藝春秋・1999年）張明秀『北朝鮮 裏切られた楽土』（講談社・1999年）朴春仙『北朝鮮よ、銃殺した兄を帰せ！—ある在日朝鮮人女性による執念の告発—』（ザ・マサダ・1994年）萩原遼『北朝鮮に消えた友と私の物語』（文藝春秋・1998年）など
- (5) 関貴星『楽園の夢破れて』（亜紀書房・1997年）31頁
- (6) 関貴星・前掲書「解説」204頁
- (7) 張明秀『北朝鮮 裏切られた楽土』（講談社・1999年）270頁
- (8) 張明秀・前掲書・271頁

謝辞：呉 基完氏へのインタビューは、二〇〇二年一月十四日午後ソウルで行われた。呉氏には、長時間の取材に協力いただき心よりの謝意を表します。独裁政治の犠牲になられた奥様に心から哀悼の意を表します。また、呉氏を紹介いただいたフリー・ジャーナリスト・萩原遼氏にもお礼を申し上げます。

（二〇〇二年三月一日 記）